

## 県産酒の高品質化・ブランド化を高める ため視察研修

### 山梨県酒造組合

山梨県酒造組合（北原兵庫会長 組合員 14 社）は、9月2～3日に中央会の組合等課題解決指導事業を活用し、栃木県の酒蔵2社への視察研修を実施した。

国内の日本酒需要は、消費者ニーズの量から質へと変化により減少傾向にある一方で、日本食ブーム等を背景に海外への輸出も年々増加している。また、全国の酒蔵の99%以上が中小企業で、杜氏の確保難、後継者の不足など課題を抱えているところも多い。

そこで、組合では県産酒の一層の高品質化・ブランド化を図って行くために、若手経営者や後継者を中心に、醸造に携わる杜氏研修会の会員など計22名により初めての視察研修を行った。

初日に訪問した1806年創業の(株)せんきん（薄井一樹社長）は、これまでの大量生産・薄利多売の経営方針を変更し、木桶づくりの伝統的製法や日本酒のドメニュー化（同じ土壌、気候、風土の水と米を使っての酒造り）にこだわった醸造の原点回帰を目指し、ブランド化に注力したことで広告費ゼロで成長率130%を実現。日本酒に新しい味や価値観を生み出した手法を学んだ。



2日目は、栃木県内の酒造り職人認定制度として「下野杜氏」の創設に尽力した松井宣貴社長（初代下野杜氏）の(株)松井酒造店を訪問。小さな酒蔵だからこそできる細やかで丁寧な人の手による酒造りや栃木県内の酒造技能者の知識・技術向上のため技術者育成プログラムの構築等について、情報・意見交換を行った。

杜氏研究会の清水紘一郎代表は、「参加者の多くが自分の蔵しか知らなかったため、とても触発された。これを機に、各社の酒質の向上と県産酒全体のブランド化が進むことを期待する。また、県内の酒造技能者同士の横のつながりも生まれ、今後も酒造技能者の知識や経験値を高めるための研修会や視察など積極的に行きたい。」と抱負を語った。